

## 富山県子育て支援・少子化対策県民会議 議事概要

1 日 時 平成29年8月4日（金）10:00～12:00

2 場 所 富山県民会館8階 バンケットホール

### 3 委員発言要旨

#### (A 委員)

- ・病児病後児保育は増加している。しかし、看護師や保育士が増加したとしても、病児の場合、医者との協力が必要であることから、医者との関係づくりを今後どのようにしていけばいいかアドバイスがほしい。

#### (B 委員)

- ・富山県の合計特殊出生率1.51と県民希望出生率の1.9とギャップがある。第3子、4子を産んでいただくことを目標にするのも理解できるが、まずは、1人から2人、2人から3人を産んでいただくことを検討する必要がある。

#### (C 委員)

- ・病児保育について、増加はしているが、実際は子どもが熱を出した場合は親に迎えに来てもらうというのが現状である。勤務医OBの小児科医の活用については、小児科の開業医で病児保育の活動を行っておられる方もいらっしゃるから、その分民業を圧迫するという意見もあり、活動が進んでいない。
- ・仕事と子育ての両立のために学童保育の充実は重要であり、学童保育をやっていただく方の人材確保のために、時給を上げるなどして処遇改善を図ってほしい。

#### (D 委員)

- ・都市圏の富山県出身女性は、Uターン率が非常に低い。県外に出ていった女性で、結婚・出産のタイミングで富山県に戻るか、そのまま残るかを考える25～35歳の「揺らぎの世代」に富山へ戻ってもらえるようなアプローチをし、富山に帰ってきてもらうことで人口増にも富山の活性化にもつながる。

(E 委員)

- ・県の施策も充実しており、子どもを育てやすい環境はできつつあると思う。
- ・どの施策も短期的なものではなく、特に子育て支援に関しては、継続的に行っていくということが大切である。

(F 委員)

- ・女性のUターン率が低い原因としては、魅力的な企業が県内にも数多くあることが十分知られていないということがあるのではないか。
- ・生活自立のできる男女をつくることが大切であり、また、お互いに生活を支えあう意識改革が必要。
- ・三世同居をしようとする時に、家族全体でお互いに生活を支えあっていくという意識を持てるよう、家族全体で研修する機会もあればよい。そうすれば、介護の問題が出てきたときでも、助け合える意識が生活の中で培われる。
- ・かなりつながる子育て支援になっているが、穴を埋めるようなさらにきめ細かい施策が必要。

(G 委員)

- ・県内高校から県内大学、短大に進学する人は 25%前後である。県内大学への進学者を拡大するために、富山で生活をするということに魅力が持てるような大学、短大になっていく必要がある。
- ・短大、専門学校への進学者は 99%近くが県内出身者であり、そのうち女性の割合が 9 割であるので、地元で働き、地元で生活をし、地元で生涯を送っていくという人材である女子の高等教育機関の充実が必要である。
- ・保育士が非常に不足している。子育てや保健、医療、介護、福祉の人材（の育成）を中心にした地方の魅力ある大学、短大の強化ということが、遠回りであるかもしれないが少子化対策の大事な柱だと思う。

(H 委員)

- ・少子化の原因の 1 つとして職場までの移動時間等により、育児にかかる時間が制限される点が考えられる。
- ・富山県では第三子以降の保育料が無料になっているが、第二子から無料になっている地域もいくつかある。

- ・子育て家庭に金銭面での援助をすることとあわせて、三世同居、近居という住み方を進めていく必要がある。
- ・放課後児童クラブについて、通常の間より遅い午後 10 時まで子どもを預かってくれるところもあり、仕事と子育ての両立についてフォローしている。
- ・イクボス宣言など、すべての施策を総合的にやっていくことが大事である。

#### (I 委員)

- ・共働きの家庭が多く、親同士のコミュニケーションが不足している。子どもたちを健全な環境で育てるために、親同士のコミュニケーションはとても大切であり、「親学びプログラム」の取組みに協力していきたい。
- ・親同士のコミュニケーションを高めるために、今後も親学びプログラムの実施を県とともに進めていきたい。

#### (J 委員)

- ・子どもが病気でも預かってくれたり、長時間預かってくれたりする保育園があるから、子どもをもう一人産もうという考えにはならず、「子どもと過ごすことが楽しい」「子育ては楽しい」という理由からから子どもをもう一人産もうという考えになる。
- ・子どもを預ける時間が長くなると、子どもと一緒に過ごす時間が短くなる。働きやすい場をつくることはもちろん大事だが、母親が子育ては楽しいということを実感できるような場づくりを応援してほしい。

#### (K 委員)

- ・放課後児童クラブの対象学年など、データをしっかり把握して施策を進めてほしい。
- ・介護と育児のダブルケアの問題についても留意する必要がある。

(L委員)

- ・妊産婦のメンタルヘルスケアが必要。産後うつが深刻化すると虐待や育児放棄、自殺を招いたりするので早期発見が重要であり、産後ケアを充実させることが必要。産後の経過がよくなないと、もう一人産もうとは思わない。県が主導して全ての市町村で産後2週間健診、1か月健診を実施できるよう推進していただきたい。

(M委員)

- ・希望する保育所に入れない隠れ待機児童や、潜在的待機児童の問題について検討する必要がある。
- ・富山県には中小企業が大変多く、自分たちの力で事業所内保育所を設置できない会社もあるため、事業所内保育所を企業団地単位で設置出来たらよい。また、その際には企業の営業日（企業カレンダー、お盆、正月、祭日に休めない所もある）にあわせて運営してほしい。

(N委員)

- ・大学進学を機に富山を離れた学生が、戻ってこられるような環境を整えてほしい。
- ・最近では結婚、子育てのマイナスイメージが先行している。よりよいロールモデルが必要で、結婚してよかった、子育ては楽しいものだというプラスイメージを発信することが重要。

(O委員)

- ・経済的なゆとりや、時間のゆとり、働き方のゆとり、これらが総合的なものとして親の心のゆとりになってくる。
- ・県単医療費助成を利用するための福祉医療費請求書の電子データ化について検討していると聞いている。保護者の利便性が高まり、良いと思う。電子データ化に対する県の支援が必要である。
- ・また、県内各市町村の子ども医療費助成は（対象年齢などが）県の助成制度より拡大されており、そのレベルまで県の支援の拡大をお願いしたい。

- ・児童クラブ活動に、親が子供と一緒に参加することで、親子の思い出が作れ、子どもの心の成長を育む。最近では親と一緒に参加せず、児童クラブの役員に子どもを任せるといった形に変わってきているので、親の積極的な参加を促す施策、協力体制が必要。

#### (P 委員)

- ・子育てに関する制度や支援が充実しているが、すべてを把握している一般住民がどれだけいるのか疑問である。
- ・働き方が多様化している現代の親御さんには、延長保育や、放課後児童クラブ、母親クラブの活動などを十分に活用していただけるとよいのではないかと思う。

#### (Q 委員)

- ・富山県が子育て支援に力を入れていることは分かるが、それらの支援全体を網羅している人がどれだけいるか疑問であり、PR方法を工夫すべき。
- ・出産適齢期があることがよく知られるようになった。少し先を見据えた子育て支援をやっていかないといけない。大学院に進学する女性が学業と妊娠・出産の両立ができる体制づくりを。
- ・イクメンカジダンが広まってはいるが、何をすればいいのかわからないお父さんが多い。夜間開催の父親も参加できる出産準備教育をしている保健センターもある。
- ・事業の量よりも質を、また、必要な人に確実に届ける支援を意識してほしい。例えば、受診率よりも受診の満足度などの評価を大事にしたり、子育ての支援講座などを対象者別に実施したりすることを検討していく必要がある。

#### (R 委員)

- ・子どもが1人でも子育てや経済的負担が大変で、次に子どもを持つ意欲がわかないため、2人目の壁が大きくなってきている。
- ・子育ては個別の問題なので、個別の不足感、不安にこたえる取組みをフォローする必要がある。

(S委員)

- 子育てのために仕事を休んでおられるお母さんが、職場復帰した際、自分が以前働いていた位置に戻れるのかという不安を持っている人もいる。
- 放課後児童クラブで小6までの子どもを受け入れてくれるところもあるが、小3以下の子どもの入所希望者の半分も入ることができない地区もある。また、閉所時間と母親が仕事を終え子どもを迎えに行く時間とズレがあるため、子どもが鍵っ子になってしまうことがある。
- ファミリーサポートセンターも要望があってもそれに応えられないケースもあるので、登録者の数だけにこだわらず、実態がどのようなものなのか細かく探してほしい。

(T委員)

- 働き方改革について、事業経営者の方にはかなりの理解をいただいているが、実際何を進めていただくかということ、実質の部分が難しいというのが現状である。